

「ハロウィンの夜に思い出して欲しいこと」

詩篇 46 篇（新共同訳）

I 導入部

- みなさん、おはようございます。お祈りをします。

ハロウィンと恐れ

- 以前もお話しましたが、私は、昨年の夏までアメリカに約 3 年間、留学をして、大学院で聖書を学んでいました。その後久しぶりに日本に帰って来てみて、驚いたことがあります。
- 去年も驚いたのですが、今年も改めて驚いていることがあります。それは、ハロウィンが、常に華やかに、非常に盛んに祝われているということです。
- もちろん、アメリカに行く前も、ある程度、ハロウィンは、日本で祝われていましたが、アメリカから帰ってきて、町を歩いたり、店に入ったりするときに、ここまでハロウィンが盛大に祝われているのかと驚かされましたし、今年ももうすでにいろんなイベントがもたれている。
- KGK の学生に聞いたのは、学校では女の子たちが、ハロウィンの日には、お菓子を配り合っている。そういう人もいます。私の学生時代は、もちろんそんなに昔ではないですが、バレンタインはそういう日でした。でも、ハロウィンは、そこまでメジャーではなかった。しかし、現在は非常に流行っているのだということが分かったのです。
- しかし、そのように大流行しているにもかかわらず、多くの日本人はハロウィンの由来や意味を知らないことが多いと思うんですね。
- ハロウィンは“All Hallow’s Even”の略だと言われています（くりかえす）。“Hallow”は「神聖な、聖なる」という意味です。“All Hallow”というのは、「すべての聖人（聖なる人）たち」という意味です。「聖人」というのは、聖書によれば、全ての、罪赦されたクリスチャンのことで、特に先に天国に行ったクリスチャンたちのことを思い出して、神さまに感謝を捧げ、また天国での再会を期待する日、それが、11/1 に持たれていた“All Hallow’s Day”、日本語では「諸聖人の日」と呼ばれる日です。
- “All Hallow’s Even”の“Even”は古い英語で、「夕方」という意味です。“Evening”や、クリスマスに使うイヴもそれが由来です。つまり、ハロウィンとは、「諸聖人の日の前夜」という意味です。そう考えると、ハロウィンというのは、実は、聖なる日であるはずなのです。
- では、なぜそんな日がおばけの日になるのか。実は、この日は、ヨーロッパにキリスト教がやってくる前は、こういう日でした。
- 「霊の世界」と現実の世界の間の「扉」が開き、死者の霊がやってくる。これだけ聞くと、日本のお盆とちょっと似ていると思うかもしれません。
- ただ、恐いのは、その日にやってくる霊というのは、時に危害を加える。悪いことする。ひどい場合には、生きている人を一緒に死の世界に連れて行ったりする。で、それらの霊から、死から、身を守るために、人々は、お面や衣装をつけたり、あるいは炎を焚いたりした。
- かぼちゃをくり抜いて作る「ジャコランタン」も、もちろんいろんな説があるのですが、家の軒先に置いて悪い霊を怖がらせて、入ってこないようにしたのが始まりだと言われています。
- この時代のカレンダーでは、この日は「冬」が始まる日だったそうです。確かに、だんだん寒くなってきて、日も短くなってきていますよね。暗闇が世界を覆う時間が長くなってくる。
- 遠い昔、人々は暗闇を恐れました。私は、小さいころ、けっこうかわいい子どもだったんですが、暗闇が苦手でした。暗いところが怖かった。暗闇のなかにいると、何かが襲ってくるような気がしていた。暗闇が広がっていく冬が来る。人々は暗闇を、冬を恐れました。
- また遠い昔、冬は人が亡くなりやすい、死にやすい季節でもありました。食べ物が不足して、飢餓が起こったり、病気が流行ったりした。人々は「死」を恐れていた。

- ハロウィンは「恐れ」という感情から始まりました。人間を越えた霊的な存在、あるいはそれらがもたらす「死」。それを恐れた人々がいた。ハロウィンは「恐れ」という感情から始まっていったのです。
- その後、ヨーロッパにキリスト教が広まっていきます。当時の教会は、この日をさきほど言った「諸聖人の日」とします。そして、ヨーロッパの多くの地域では、それ以前の風習は忘れられていきました。
- しかし、イギリスやアイルランドといった国々では、この習慣は続いていく。むしろ、その聖なる日の前の晩こそ、「悪霊」という、これは聖書に出てくるのですが、彼らが動き回る。そのように信じて、「恐れ」は続いていった。
- もちろん、現代のハロウィンを見ると、それよりも楽しむという要素が強いと思います。しかし、今でも、ハロウィンが近づくと、テレビでホラー映画や怖い話が語られたりしますよね。
- また、かなり怖い、気持ち悪い衣装やメイクをしている人々もいます。私がアメリカにいたときには、リアルにおばけに見える格好をした人をたくさん見ました。
- また、ボストンという町の近くに、セーラムという町があります。そこはかつて魔女裁判が行われた場所でした。無実の人を魔女として殺したということは、当時の教会の過ちですが、ここでは、ハロウィンの夜には、本気で悪魔崇拝をしている人々が、世界中から何千人も集まっているそうです。
- もちろん、楽しさもある。でもそれとともに、「恐れ」をも覚えるというのが、このハロウィンの季節ではないかと思うのです。

II 本論部

1. 恐れないと歌うイスラエル

- 「恐れ」というのは、人類がずっと取り組んできて、でも解決できなかった、そのようなテーマです。たくさんの宗教が、哲学が取り組んで、解決できなかったテーマです。
- さきほど詩篇 46 篇を読みましたが、実はこの詩のテーマが、「恐れ」なのです。その意味で、ハロウィンの季節に読むにふさわしい聖書箇所です。
- イスラエルの人々は、歌いました。3-4 節をお読みます。「わたしたちは決して恐れぬ／地が姿を変え／山々が揺らいで海の中に移るとも海の水が騒ぎ、沸き返り／その高ぶるさまに山々が震えるとも。」
- これは、天変地異、自然災害の様子です。ご存知の方も多いかもしれませんが、この詩は、3.11、東日本大震災の後、よく歌われました。地震や津波が起こった。まさにここに書いてあるようなことが起こった。そういうことはこれからも起こる。しかし、そのただなかで、教会は賛美するのです。「わたしたちは決して恐れぬ」と。
- 7 節の「すべての民は騒ぎ、国々は揺らぐ。」というの、政治的な混乱について言っているのではないかとされます。
- 10 節で、「地の果てまで、戦いを断ち／弓を砕き槍を折り、盾を焼き払われる」と歌われているということは、戦争が起こっていたということを表しているのではないかとされます。そのような状況の中でも、イスラエルは賛美した。「わたしたちは決して恐れぬ」と。
- 「わたしたちは決して恐れぬ」。それは、素晴らしい賛美の言葉です。しかし、私たちが覚えたいのは、聖書で、神様が「恐れるな」「恐れる必要がない」とおっしゃるとき、私たちが「恐れぬ」と言うとき、大抵の場合、そう言われた人やそう言う人は恐れているんですね。
- ここでも、「わたしたちは決して恐れぬ」と、イスラエルがあえて賛美をしたのは、彼らが恐れていたからだと思うのです。恐れていたからこそ、逆に、主がこのように賛美させてくださったのではないかと思うのです。

- 私たちは恐れるのです。みなさんは、何を恐れていますか。私たちはたくさんのもを恐れて、たくさんのもを怖がって、生きていると思うのです。それが普通です。
- 例えば、私は、ジェットコースターを恐れています。ジェットコースターが好きな方は、この中にもたくさんいらっしゃると思いますが、全然理解できません。しかし、おそらく、これも、私が「死」を、死ぬことを恐れているからなのかもしれません。ハロウィンを生み出したヨーロッパの人々のように、死を恐れているからかもしれません。
- あと、遊園地ネタで行くと、私はお化け屋敷が大嫌いです。申し訳ないですが、全然理解できません。しかし、そこにあるのは、悪霊への恐れかもしれません。ハロウィンを生み出した人々のように、悪しき霊の力を恐れているからかもしれません。
- あなたは何を恐れているのでしょうか。イスラエルの人々のように、自然災害を恐れているのでしょうか。政治的混乱を恐れているかもしれない。戦争を恐れているかもしれない。
- あなたは何を恐れているのでしょうか。お金が足りなくなることでしょうか。人からの評価でしょうか。人間関係でしょうか。今週の予定でしょうか。テストですか。受験ですか。あるいは、もっと将来のことでしょうか。死んだ後のことでしょうか。
- 私たちの、生まれつきの姿では、自然な姿では、とても言えない。「わたしたちは決して恐れない」などととても言えない。今挙げた一つ一つは、私自身が恐れていたこと、あるいは今もなお恐れていることです。あなたはいかがでしょうか。

2.なぜ恐れないか？

- 今あなたが何かを恐れているなら、チャンスです。今、あなたが何かを恐れているなら、喜んでください。恐れをとり除いてくださる方を知るチャンスです。
- なぜ、この詩篇において、イスラエルは「決して恐れない」と歌うのでしょうか。二つの理由を確認したいと思います。
- 一つ目のことは、神がともにいるからです。神が共にいるからです。
- 少し戻っていただき、詩篇 46:2 をもう一度お読みします。「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦。苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる。」
- 避けどころとは「避難所」です。「砦」、それは守ってくださる存在だということです。
- 実は、ハロウィンの日は、教会にとって、もう一つの記念日なんですね。それは宗教改革の記念日です。マルチン・ルターが教会の改革をスタートした日が、実はハロウィンの日なんです。
- 当時、教会のなかでは、このように信じられていました。献金すれば、素晴らしい聖人たち、すでに天国に行ったクリスチャンたち、聖人たちの「徳」、つまりポイントみたいなものですが、金を出せば、ポイントが与えられて、罪人でも天国に行ける。先ほど触れましたが、ハロウィンの翌日の「諸聖人の日」は、聖人たちのことが語られますので、まさに、そのような誤った教えの象徴的な日でした。
- だからこそ、マルチン・ルターはその前日、ちょうどハロウィンの日に、ちなみに当時のドイツではおばけの日ではなかったですが、こう唱えた。「それはおかしい！お金を払えば、救われるなどというのはおかしい！信仰のみだ！」
- しかし、当時の教会は、そのようなルターを迫害します。ルターは命を狙われます。そのようなルターが愛して、恐れの中かで、読み続けたのが、実はこの詩篇 46 篇です。彼はこの詩篇から、「神は我がやぐら」という非常に有名な賛美歌も作っています。
- そして、実はもう一人、この詩篇 46 篇を心から愛した信仰者がいます。それは、奇しくも、ルターにちなんで名づけられた、マーティン・ルーサー・キング牧師です。
- ご存知の方も多いかと思いますが、彼も、人種差別や貧富の格差、そして戦争に反対したため、命を狙われました。実際に「お前を殺してやる」とか「お前の家族を殺してやる」などと、何度も殺害予告があり、家が爆破されたこともありました。その彼が、死を恐れるたびごとに読んだのが、この詩篇 46 篇だったそうなんですね。

- 神は、苦難のとき、必ずとともにいて、あなたを助けることができる方である。だから、恐れない。恐れる必要がないというのが、一つ目のことです。
- 一つ目が、今のことであるとすれば、二つ目は、将来のことです。
- 5,6 節には、もう一つの、私たちが恐れる必要がないという根拠が書かれています。「大河とその流れは、神の都に喜びを与える／いと高き神のいます聖所に。神はその中にいまし、都は揺らぐことがない。夜明けとともに、神は助けをお与えになる。」
- ここに、「大河」とありますが、興味深いことに、実は、神の都エルサレムには、大きな川はないんですね。ですので、多くの学者たちは、これは、大きな川があるエデンの園、そして、終わり日にやがて実現する新しいエルサレム、黙示録によると、そこには川がありますので、そのことを歌っているのではないかと言うのです。
- その川は、大きな喜びを与える。その川は、私たちが癒す。神がその中におられるので、その都は永遠に揺るがない。この詩篇で歌われているような、完全な平和が実現する。
- 私は映画を観るのがけっこう好きです。特に、ハッピーエンドの映画が好きです。ディズニーとか良いですね。なぜなら、絶対にハッピーエンドだからです。
- そして、これも誰にも理解されないのですが、映画を観るときには、最新版でなければインターネットに「ネタバレ」のウェブサイトがあると思うのですが、観る前に、終わりがどうなるかをチェックしておくことが多いんです。
- あくまでもチラッとです。そうでないと楽しみがなくなってしまうので。そして、そうすると、安心するんです。ああいろんなことがあっても、ドキドキすることがあっても、最後はこうなるんだな。最後はハッピーエンドなんだなって分かる。そうすると、安心して映画を観れるわけです。
- これは全く理解されない私の趣味のようなものですが、何が言いたいのかというと、クリスチャンの「希望」とはそのようなものであるということなのです。
- 困難はあります。ハラハラドキドキするんです。そして、映画では、ハッピーエンドの映画だと人は死にません。死んでしまったら、それはハッピーエンドではない。しかし、現実では、誰にも避けることはできません。ここにいる全員が、やがて死にます。若い人が後などという保証はどこにもありません。
- しかし、イエス・キリストに信頼する者は、イエス・キリストが再び来られる日、よみがえり、イエスさまと顔と顔を合わせて出会い、「永遠の都」に導き入れられる。私たちにはハッピーエンドが用意されている。
- それまでは、私たちの人生で起こることの一つ一つに意味があるということは、クリスチャンは知っています。もちろん、その意味が何かということが分かることもありますが、多くの場合はわからない。どうしてこんなことが？ということが起こる。しかし、その時には、イエス様が来られる時には、全ての出来事の意味が分かる。納得が与えられる。その希望が与えられているから、私たちは恐れない。恐れる必要がないというのが、二つ目のことです

3.力を捨てよ

- 詩篇 46 篇は、招きの言葉をもって、幕を閉じます。「力を捨てよ、知れ／わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる。」
- 「力を捨てよ」は、別の聖書の訳ですと、「静まれ」「やめよ」となっています。私たちは、なぜ恐れなくて良いのかということ、すぐ忘れてしまいます。一歩歩けば、すぐに忘れて、忘れてしまう。
- でも、普段の働きをやめて、礼拝に来ると、心を静めて、力を抜いて、そして知ることができる。神がどのような方であるかを知ることができる。あなたを愛し、あなたとともにいて、永遠まで導く方、それが私たちの神です。この方があなたの恐れをとり除く。

- 「わたしたちは決して恐れない」。教会は歌い続けるのです。ハロウィンの夜、恐れを覚えることがあるかもしれない。しかし、そのような時こそ、立ち止まって、力を抜いて、静まって、祈って欲しい。
- 私も、ある時、本当に死ぬのが怖くなった時がありました。その時には祈るしかなかった。これまで学んだ知識が何の役にも立たなかった。しかし、助けてくださいと祈るなかで、私たちの神がどのような方であるのかということをお教え、感じさせてくださり、体験させてくださり、本当に深い安心が与えられたのです。
- あなたにも、誰が神であるかということをお知らせしたい。本当に知らせたい。あなたを愛する神が、あなたを永遠に導こうとされている。この方に信頼し、それゆえに恐れない教会として、この一週間の歩みに遣わされていこうではありませんか。お祈りしましょう。